

# 課題によるパラグラフィティングから口頭発表へ —— 英作文から英語の発話までの指導の授業手順 ——

國 吉 初 美

## ABSTRACT

This paper explains the classroom teaching procedure of an English writing/speaking course. Students do paragraph writings, revising, rehearsing, and making individual presentations. Students will also do gentle peer feedbacks while listening to the others do short speech presentations in front of the class. This final activity of speech presentation will be made up of around 6-7 English sentences and will last for about 90 seconds. Each script of their speeches are their originals. Students experience producing English language to express their own feelings in front of the whole class. And this paper explains fully about the details how to lead the students toward this final goal. Considering their level of English language, this is very interesting. This paper will show how important it is to really communicate with the people in the language students use, no matter how much they are inefficient with the language.

### 1. はじめに

本稿では、たくさんの文例を記憶する作業を学期の 15 回の授業のうち 8 回を使って実施した後の、3 回にわたって実施された、課題を与えてのパラグラフィティングの指導から、その間に作成された短い作文のうち の 1 つを選んでの口頭発表にいたるまでの手順を報告する。

学生は、千葉県農業大学校研究科 1 年生の学生 20 名である。これは 4

年制大学では、第3学年にあたる。彼らは農学科における2年間の間に、半期15回の英語の授業を、二度受けて及第してきた者である。研究科に入る者は、農学科の総数の1/4程度で、真面目で素直で向上心を持った学生達である。

手順は①作文指導、②リハーサル、③プレゼンテーション、の3段階がある。これから、それぞれの授業手順について詳しく述べていきたいと思う。

## 2. 授業手順

### 2.1. 背景理念

Krashen はその著書 *Natural Approach* (Krashen 1983) の中で、言語は大量の言語の input を通して自然に体得されていくと述べた。その際受け入れられる input は、現在ある言語能力 (i) より少しだけ上のものが望ましく (i+1), それによって、だんだんと言語は上達するとした。この考え方を拡大して、彼は *Comprehensible Output* (Krashen 1991) の考え方を提示した。ライティングやスピーキングの分野においても、現在ある言語能力 (i) の範囲を少しだけこえた範囲を目標 (i+1) として指導し、あまりに難度の高い単語や言い回しを使わず、自分の力に見合った表現をしていく、という考え方である。この方式にのっとって、だんだんに授業内容の質をあげていくと言うことも、指導の際の目標だった。作文において、テーマは非常に具体的なものから抽象的なものへと移り、リハーサルはだんだんとより実践的と成り、プレゼンテーションは、クラス全員の聴衆を前にしての大掛かりなコミュニケーションへの挑戦の場となった。

### 2.2. 作文指導

作文指導では、1回の授業時間内に3つのテーマが提示される。それぞれのテーマについて、英作文の時間が15分と発表の場が15分与えられる。これを3回繰り返し替えて1授業時間を終わる。授業時間の構成については図1に示す。

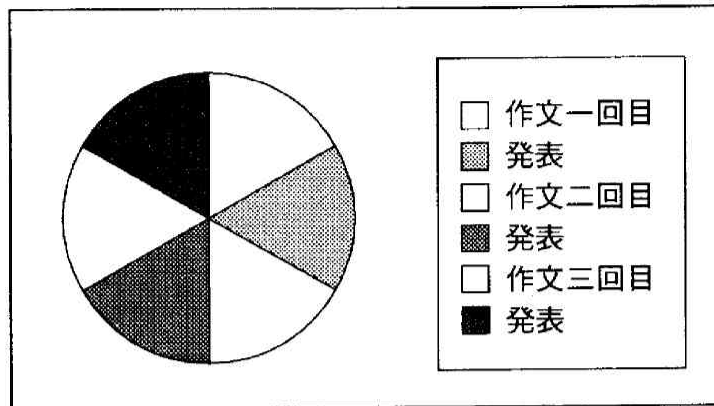


図 1 作文指導の 1 授業時間の割り振り

この円グラフを、頂上から時計回りに見て、作文の 1 回目に 15 分、その発表に 15 分、作文の 2 回目に 15 分、その発表に 15 分、作文の 3 回目に 15 分、その発表に 15 分となっている。

ある日の作文テーマは、1 回目が「What I Had for Lunch」、2 回目が「The Fruit I Like Most」、3 回目が「The Weather I Like Most」だった。学生は、辞書の使用は許可されない。テーマは、前の授業時間に提示され、必要な単語があったら事前に単語帳をつくってくるように言っている。基本的に、すでに自分で使える英単語群の範囲で作文をすることになる。辞書を使うと、作文に非常に時間がかかることと、必要以上に難しい単語を使ったがる傾向があるので禁止した。学生は、テーマにそった内容を 7 つほどのセンテンスで 1 つのパラグラフの形のお話に作り上げる。手法はフリーライティングで、講師は単語の綴りの間違いや文法の間違いなど一切チェックせず、好きに書かせる。目標は、15 分以内に 1 つのお話を英文で作り上げる能力育成である。内容が高尚である必要はない。テーマは、食べ物から天候などの非常に身近なものに限られる。その日の昼食に何を食べたかについて語る時、対象をデザートに出たオレンジ 1 つに限定することも自由である。

大事なことは、決められた時間内に作文を完成することで、その後の発表の時間に指名されればクラスの前で読み上げなければならないので、緊張感が常にあることであろう。

発表は 1 つのテーマにつき 3 名の学生を指名して、クラスの前で作成した作文を読み上げさせることを柱にしている。1 人が読み上げたら、講師は聞き取れた使いやすい英単語を黒板に書き出して、単語帳をつくる。

1人につき6語くらいずつ集める。クラスにその単語帳をノートに写させたあとに、その作文に要したセンテンスの数を読み上げた学生に聞いて黒板に書き込み、作文全体に対するコメントをしながら、この話をするのにこのセンテンスの数では短い、あるいは長い、と理由を添えて話す。作文をする時には、意見を出したあと具体例を出して結論を引き出すように指導するが、あまり短いとバランスが悪くなる。大体7つのセンテンスが適当だが、短く不十分であった場合、どこをもっと詳しく述べるとよかったかを指摘する。学生の作文例をあげる。

**\* 作文例 \***

その1) I like ice cream. The ice cream is sweet and is cold. Ice cream is made with milk. Honda too, likes ice cream. In the ice cream, it likes strawberry taste. (5)

その2) I love Banana. Originally banana isn't Japanese fruit, but today banana is familiar to us. I usually eat them fresh, but in summer I skewer the banana to a disposable chopstick and freeze it. Thus I make the frozen banana stick and eat it. I like this. And I like to eat banana covered with chocolate too. (6)

波下線を引いてある単語は、単語帳に書き出した単語である。コメントを述べたあと、単語帳の発音練習をしてから、次に作文を読み上げる人を指名する。1人読み上げる度に指導の時間は約5分で、毎回3人あてるので15分の発表時間になる。発表時間の指導手順を図2に示す。

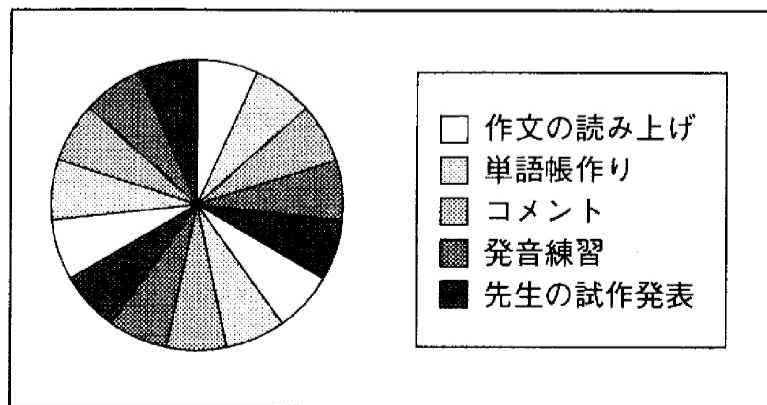


図2 発表時間の指導手順

この円グラフを、頂上から時計回りを見て、作文の読み上げに1分、単語帳作りに1分、コメントに1分、発音練習に1分、先生の試作発表に1分、という5分の固まりが、3回繰り返し替えされる。

### 2.3. リハーサル指導

フリーライティングによる作文指導を3回ほど続けたあと、9つの短い原稿が出来上がる。これを元に、1授業時間を使ってリハーサル指導をする。ここでは、プロセスアプローチによるリヴァイズを試みたあと、オーラルプレゼンテーションの留意点について説明し、それから、それぞれの留意点に着目した実戦的リハーサル練習に移る。留意点は、全部で10個あり、わたしが、母校青山学院大学英米文学科で受けた、当時の日本大学の教授であり青山学院でも教えていらした、川島虎秀先生の御指導による「オーラルインタープリテーション」の講義内容を参考にして取り出した事項である。10の留意点をあげよう。

#### \*オリエンテーションのためのプリントより抜粋\*

##### プレゼンテーションで気をつけること

1. 大きな声が出ているか。
2. 全文覚えられているか。
3. つっかえずに言えたか。(fluency)
4. 顔を上げてみんなに話しかけられたか。目線が見る人とあったか。(eye contact)
5. スピーチに表情があったか。棒読みではなかったか。(intonation, stress, rhythm)
6. 発表態度は適当であったか。(不真面目ではなかったか。立ち方, 姿勢, 服装, 他)
7. 身ぶり, 手ぶり, 顔の表情の変化など, 体を使っての表現はあったか。(gesture)
8. 何か道具を使っての発表であったか。(車について。—免許証を見せる。キーを見せる。学校について。—難しい教科書を見せる。クラブについて。—使う道具(サッカーボール)を見せる。)
9. 生き生きとした発表であったか。
10. 全体の印象。

## 発表の評価

発表の評価は、講師とクラスの仲間との両者からもらう。講師の側より上記の 10 の留意点についてそれぞれ 5 点満点で評価がなされ、その合計点（満点 50 点）が成績評価の 50 % に充当する。クラスの仲間からは一枚ずつスピーチについての感想を書いた紙片をもらう。これは一人当たり 19 通りの感想をそれぞれがもらうことができる。発表をするには資格が必要で、それは発表原稿を含めて全部で 9 個の作文を清書して提出するという課題だが、これをこなさなかった者は 20 名中 0 名であった。まとめると以下のようなになる。

- 1) 講師の側から：デリヴァリーシート（50 点）
- 2) クラスの人たちからのレスポンス：impression slip をみんなからもらう。
- 3) 発表資格：発表原稿を含めて全部で 9 個の作文を清書して提出した者

リハーサルの時間にはまず、9 つの原稿の内からスピーチ発表のための原稿を 1 つ選びだし、その原稿に付け足したり削ったりするリヴァイズの時間を設け、そのあと発表原稿清書の時間をとったあと実践練習に移る。上にあげた 10 のポイントの 1 つ 1 つに付き 2 名ずつ指名して、特にそのポイントについて留意するよう指示をしてクラスの前で原稿を手で発表させる。講師はその度にコメントを付け加える。たとえば、「大きな声」というポイントを取り上げる時は、ひたすら声がクラス全体に響き渡るかと言うことだけを課題に、具体例を前にしてみんなで改善点を考える。それぞれの留意点については、その点について得意分野であると思われる学生を選んで当てるようにする。この過程で、学生のプレゼンテーションに対する恐れを取り除き、フレンドリーな雰囲気づくりに勤める。リハーサル指導の時間の構成については、図 3 に示す。

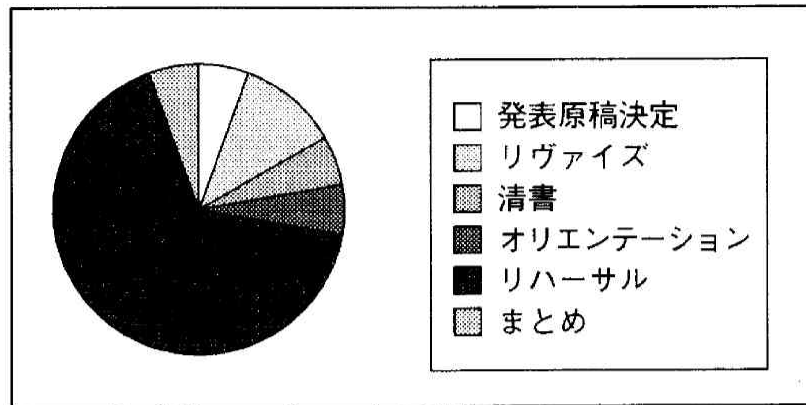


図3 リハーサル指導の時間構成

この円グラフを、頂上から時計回りに見て、発表原稿をきめるのに5分、リヴァイズをするのに10分、清書の時間に5分、オーラルプレゼンテーションに向けてのオリエンテーションに5分、実践練習としてのリハーサルに60分、まとめに5分を取る。

#### 2.4. 発表指導

最後の1授業時間を、スピーチ発表に当てる。スピーチをする際には、前の時間に講義をした10の留意点のそれぞれに5点の配点があって、全50点満点のプレゼンテーションであることをアナウンスする。講師は、10のポイントのそれぞれにつき1から5までの目盛りを付けた横棒のスケールのついた採点表を、1人につき1枚準備して当てる。採点表については、次の表を参照してほしい。

**\*評価表\***

	1	2	3	4	5
1. loudness	_____				
2. 覚えているか	_____				
3. fluency	_____				
4. eye contact	_____				
5. intonation, stress, rhythm	_____				
6. 発表態度	_____				
7. gesture	_____				
8. 道具は使えたか	_____				



9. liveliness \_\_\_\_\_

10. impression \_\_\_\_\_

TOTAL \_\_\_\_\_

さらに、講師は 20 人の学生に、それぞれ 20 枚の紙片を授業の始めに配る。これは、スピーチが終わる度にそれに対する感想やコメントを発表者を書いてあげるように指導する。これは、あとで講師が発表者ごとに集めホチキスで 1 つにまとめて授業の最後に配る。これで、発表者はただ発表するのではなく、出席者全員からのフィードバックをもらう訳で、これは第二言語習得分野におけるいわゆる **gentle peer feedback** という **motivation** をあげる効果を持つ作用となって、発表者に働きかける。のみならず、発表者は 20 人の聴衆を前にしてその視線を一身に浴び、色々な反応を目の当たりにすることで、自分の発した英語が巻き起こす周囲に対する影響を体感することができる。発表に当てられる 1 授業時間の構成は、図 4 に示すものである。

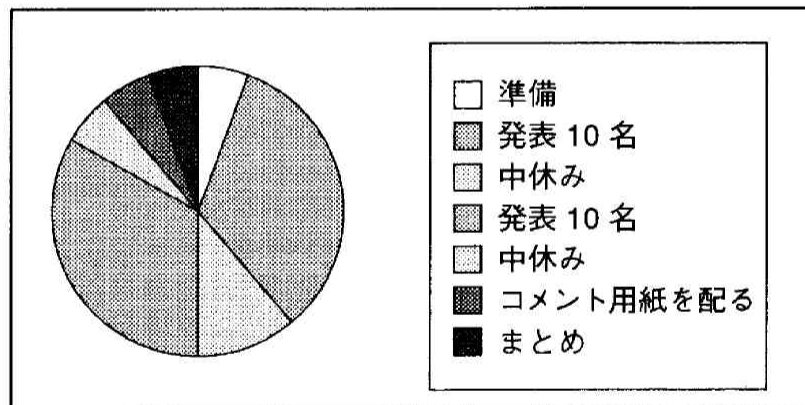


図 4 発表のための 1 授業時間の構成

この円グラフを、頂上から時計回りに見て、コメント用の紙の準備などに 5 分、10 名分の発表に 30 分、中休みを 10 分とってコメント用紙を整理し、また 10 名分の発表に 30 分、中休みを 5 分とってコメント用紙を整理し、コメントをそれぞれの発表者に配るのに 5 分、授業のまとめに 5 分を当てる。授業最後の中休みの時間に講師がコメント用紙のホチキス止めをしている間、学生には残った一枚の紙にスピーチ発表についての感想を講師宛に書いてもらい、講師はそれを授業最後に集める。



### 3. カセットテープ再生

この授業手順では、英語のプロダクティブな能力の育成に着目し、その手法はフリーライティングからプロセスアプローチを経て、オーラルプレゼンテーションに持っていくということだった。それでは、これから実際にどのようなスピーチ発表であったのか、その時に録音したカセットテープの再生をする。

#### \*テープ再生\*

##### Menu in the Lunch

It was, ah/, orange./ I like, ah/, orange/ very much ! (*class chuckles.*) Ah, from the// ah, ah (*he begins to giggle and tries to stop it. whole class starts to giggle.*)/, origin (*class stops to giggle.*)//, Ehime is/ famous. The orange/ is yellow. There/, there/, there (*he begins to giggle again, and finds it hard to stop it.*)/, there is, ah, many/ vitamin C/ in the orange. (*he becomes serious.*) Vitamin/ C/ is/ very good/ from the/ skin. (*he is very serious.*) So/, I love orange./ (*in a loud voice.*) I love orange !! (*in a very loud voice. class bursts into a friendly laughter. they give him a big clapping.*)

/ → 短いポーズがあった。

// → 長いポーズがあった。

( ) → ト書き

下線部 → 強調して、発音された。

文法的に完全ではないけれども、言わんとする内容は十分に伝わり、それにより聴衆の学生達が喜び、面白い所では笑う、という反応を再生して表現した。聴衆の学生達は、発表者の発音する英語を聞くだけでその話の内容を理解し、共感し、手を叩き、笑い、喜び、楽しんだ。これが、コミュニケーションだという実感を強く得る事のできる時間となった。

### 4. 授業の特徴

この授業手順は、Swain の言う Pushed Output Hypothesis に基づいて

いる。**Pushed Output Hypothesis** とは、指導者は学生を **output** する状況に追い込んでいくと、学生はその持てる言語能力の範囲内でおぼつかないながら言語の **produce** を始める。この状況の発生の繰り返しによって、学生の **output** も繰り返し行われ、しだいに学生の言語の **produce** はなめらかになされるようになり **output** における言語能力があがっていくという説である。ライティングもスピーキングも **productive** な言語能力であり、この授業手順においても **Swain** の **Pushed Output Hypothesis** にしたかった。

今回は、課題をして、規定の時間内に、ともかく一つのお話を英文で作り上げるという作業を 9 回したあと、プロセスアプローチに基づいてリヴァイズを行い、そこからオリエンテーションやリハーサル練習を経てスピーチプレゼンテーションまで持っていく、という授業の流れをそれぞれの手順を追っていくことで御紹介した。

規定の 15 分の時間内での英文によるお話の完成を 9 回実施する練習は、学生達の持てる能力の範囲内で如何にフルに英語を活用するかという意味での英語力の **fluency** を彼らに与え、英語の **produce** に慣れるという効果があった。

スピーチのためのオリエンテーション等では、オーラルプレゼンテーションに対する **Affective Filter** を低める役割を果たし、それは **Krashen** の提唱するような **input** の方向だけではなく、今回のような **output** の方向でも有利な効果があったと信じる。

スピーチプレゼンテーションでは、コメント用紙で **gentle peer feedback** を得ることで英語の発話に対する **motivation** が高まると共に、英語によるコミュニケーションが成り立つことを実地に体験することで英語を使っての人との交流に対する関心が高まったと考える。特に今回のような 1 対 20 のようにインパクトの強い交流を体験をしたあとでは、実際の日常会話にあるような 1 対 1 の会話に対する恐怖や気後れは大分軽減されたのではないだろうか。英語によるコミュニケーションに対する学生達の自信の芽生えや、それを楽しむ姿勢というものが見られた。

作文の過程において、獲得をしたと考える英単語の数は全部で約 200 だった。スピーチに向かって覚えた英文の長さは 7 センテンスで、約 1 分半の長さのストーリーである。仲間の作文の読み上げやスピーチを聞く機会は、全部で約 70 回分だった。仲間のスピーチに対してなんらかのレ

スポンスをする機会が同じく約 70 回分あり、そのうちその内容を書いて相手に渡したのは 19 回分だった。この授業手順の流れの中で、英語によるコミュニケーションの成立がなつたと考える。学生達にとって、実際に伝達内容のある生の英文を適当な長さで大量に聞いたことは、その内容を理解してレスポンスすることと共に貴重な体験だった。講師の立場では、英語でのコミュニケーションの可能性や重要性を認識させられた。

## 5. アンケート結果

授業の最終日に講師に対してもらった、授業の内容に対するコメント用紙からの抜粋を Appendix 1 に示すものとする。

## 6. 結語

本稿では、英作文から英語の発話までの指導の過程を、その手順を追っていくことで分析した。英語のプロダクティブな能力は、リセプティブな能力（リスニング、リーディング）に較べ、指導がより難しいとされている。だが物事をシンプルにとらえ、たくさんの練習を積み重ねていけばやがてははじめの一步があり、それが動機付けとなって次のさらなる進歩がある。

今回たどりついた 90 秒のスピーチは、たどたどしい一步かも知れないが、そこには確かに英語を介しての対他者（大勢）とのコミュニケーションがあった。この授業が、学生たちが実社会に出たときに英語におけるコミュニケーションが必要になったときの一段目の踏み段になればよいと私は考える。

本稿は、第 40 回（2001 年度）大学英語教育学会（JACET）全国大会にて、2001 年 9 月 15 日（土）15：30～16：00 に、北海道札幌市の藤女子大学新館第 7 室（552）において筆者が行った日本語による口頭発表の草稿に加筆訂正をしたものである。

## Appendix 1

### \*コメント用紙抜粋\*

その1) 第一回目の授業では、もう一言英文を話すだけで緊張して大変だったけど、回を重ねるごとに、やはりなれてきてどんどん楽しくなった。最後のスピーチでも、やはり緊張してしまい、頭の中が真っ白、とまでいかなかったも、単語を忘れてしまうなど、くやしい思いをした。スピーチをして、良かったと思えることは、自分なりに、**native** の話し方に近づけるように、文を流れとして、つかめたことだと思う。今まで英語を学んで何年にもなるが、**native** のように **in a** をイ(ン)ナとよむなど、大勢の人の前でははずかしいなどという感覚があって、ずっと日本英語で読みつづけていたが、英語をよく聞くとイントネーションのつけ方等が感覚的につかめるようになるので、まだまだだが、これからもより **fluently** に話せるよう努力を続けていきたいと思う。

その2) 最初も今も文をつくるのは難しいし、文法もめちゃくちゃで文になっていないし、大勢の前で発表するのは緊張して思っていたより上手いかわないけれど、やるのは楽しくてよかった。外国では自分の意見は恥ずかしがらずに堂々と言うけれど、自分はまだまだだなどという事がよくわかった。あとはちょっと準備をし出すのが遅かったのが反省。もう一度あったら、みんなの前でにっこり笑って完璧なスピーチをしたい。文章をつくるのも、題材は身近なものから少しずつ作っていったのがよかった。でも、みんなの発表の内容は簡単な単語しかわからないのが残念。作った文章の文法とかが正しいのかとかも先生に教えて欲しいです。

その3) 普段はなしてる言葉を英語に直すことはあまり英語を使わないのでとてもむずかしかった。日本語の難しい表現を英語に直すととても簡単な言葉になったりして勉強になった。スピーチをすることなんてめったにないので壇上でとてもきんちょうした。

その4) 英語の授業は今までやっていたけれど、自分で文章を作ることはほとんどなかったのでも考えた。自分が言いたいことはあるのになかなか上手く文章にすることができなかった。そして考えた文章を授業中に発表した

りするので声をたくさん出したように思う。授業中に声を出し、単語をいったりするのっていいことだな、と思った。でも、なんだか焦ったりして、うまく言えなかったりもした。緊張もした気がする。

その5) 英語で自由作文を書くことになり、不安がいっぱいでした。しかし、いざ取り組んでみると、とても楽しく、毎回出されるタイトルが楽しみでした。実際に書いてみると、いつも頭の中にありそうな単語を使って文章にしてしまいました。もっと普段から英語に親しみたいなあと思いました。スピーチはとても楽しかったです。いい経験になったと思います。自分の伝えたいことをみんなにわかるように伝えることは難しいと思いました。またやりたいです。

#### 参考文献

- Krashen, Stephen D., and Terrell, Tracy D. 1983. *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*. Pergamon Press.
- Krashen, S. D. 1985. The Input Hypothesis. Ch. 1 of *The Input Hypothesis: Issues and implications*. (pp. 1-32). Harlow, UK: Longman.
- Krashen, S. 1991. The Input Hypothesis: An Update. Paper presented at 1991 Georgetown University Round Table on Languages and Linguistics.
- Kuniyoshi, H. 2001. "Writing English in Quantity — An English Writing Class with A Lot of Language Input —". *Language Education & Technology Number 38*. (pp. 125-143). Japan Association for Language Education & Technology.
- Swain, M. 1985. "Communicative competence: Some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development". In S. M. Gass & C. G. Madden (Eds.), *Input in second language acquisition* (pp. 235-253). Cambridge: Newbury House.